

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 107

7/14 2006

目 次

3つの山を越えて.....	1
日本中東学会第23回年次大会のお知らせ.....	3
第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1) 教育現場の中での中東・イスラーム」迫る.....	3
会則改正のお知らせ.....	5
理事会・総会報告.....	8
第22回年次大会報告.....	14
アジア中東学会連合(AFMA)第6回東京大会報告.....	25
日本中東学会年報(AJAMES)編集委員会報告.....	36
「日本における中東研究文献データベース1989-2006」 新規業績登録のお願い.....	38
日本中東学会共催資料・写真展「若きアフガニスタンの記録」 および関連講演会の開催.....	40
第15回KAMES国際大会開催のお知らせ.....	41
国際交流基金委託業務「日本における中東研究」 「中東における日本研究」現状調査の終了.....	42
寄贈図書.....	43
2007年度会費納入のお願い.....	44
事務局より 会員名簿発行の隔年化について.....	45

3つの山を越えて

日本中東学会会長 三浦 徹

5月の中東学会年次大会&第6回AFMA大会は、300名をこえる大盛況のうちに終了した。また、6月12-16日にアンマンで開催された第2回中東学会世界大会(WOCMES)も、日本中東学会が企画した3つのパネルをはじめ、20名をこえる学会会員の参加があった。全体では126のパネル、77カ国から1200名の参加という盛況で、現代研究(とりわけパレスティナ問題、湾岸研究、ジェンダー)が目立った(詳細は次号ニューズレターで報告)。昨年4月に第11期会長に選出されたときは、AFMAとWOCMESのふたつの大会が同じ年度に重なることがわかっていただけに、たいへんなときに役が回ってきたと内心怖じ気づいていたのだが、前者は日本学術振興会の、後者は国際交流基金の事業助成をうけることで山場を乗り切ることができた。事業申請をはじめ細かな事務処理に奔走をされた国際交流担当の臼杵、酒井、赤堀理事と飯塚事務局長に感謝したい。

AFMA大会に来日した楊中国中東学会副会長は日本や韓国の中東研究が多彩になっていることに刺激を受けたとのべ、またCHOI韓国中東学会会長は組織だった大会運営を賞賛し、秋のKAMES国際大会はJAMESをお手本にこれを上回る大会にしますよとにこやかに語った。次期2007-08年の会長・事務局はモンゴル中東学会に移り、08年に第7回大会をウランバートルで開催することが決まった。WOCMESも2010年に第3回を開催することを決め、候補地を募っている。

年次大会総会の挨拶で述べたように、日本の中東研究・中東教育のすそ野は拡大しており、学会会員数は今年度の新入会員25名をえて、ついに700名をこえた。今年度からは中東・イスラームにかかわる2つの大型地域研究プロジェクト(人間文化研究機構による「イスラーム地域研究」推進事業、および文部科学省による「ニーズ対応型地域研究」)が5年計画で開始される。しかし、研究も教育もなお研究者の個人プレーに多くを依存しており、とりわけ関心の増大にこたえる教育体系づくりが課題であろう。公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす」(東京、山口)は、学会としての新しい試みである。

学会運営についても、体制づくりの途上にあり、財政面では現在の会費収入だけでは不足し、科学研究費補助金や国際交流基金の事業助成などをえて、AJAMESの刊行、AFMAなどの国際集会、中東文献データベースなどの事業を行っている。また学会事務局も年報編集委員会も持ち回りで、学会事務はアルバイトの方に頼りながらどうにか切り回している。今回の総会では、学会の財政基盤・運営基盤を強化するために、会費の値上げを提案し、ご承認をいただいた。値上げをした会長として歴史に悪名を残すことになるのかもしれないが、学会運営の現況と未来について、多くの会員のご理解がえられたことを嬉しく思う。これを機に、学会の活動がますます多くの方々に裨益するものになることを願っている。

日本中東学会第 23 回年次大会のお知らせ

このたび来年度の大会を東北大学大学院国際文化研究科イスラム圏講座でお引き受けすることになりました。目下、大学内外の会員にお願いして実行委員会の組織を急いでいます。「講座で」と表現したのは、学会活動が大学教員の社会活動と評価され、また何よりも学会活動が学生教育上不可欠であるからですが、文部省（当時）から、勤務時間内学会活動の禁止通達がでたことは、もう夢のようです。

さて、当研究科は教養教育大綱化の余波をうけて、平成 5 年国際地域文化論と国際文化交流論 2 専攻 13 講座、文理融合方式で発足し、大学院重点化の学内方針を受けて、平成 12 年には国際言語文化専攻 5 講座を追加しました。また、イスラム圏研究講座は、イスラム圏社会・文化論、イスラム圏政治論、イスラム圏近現代論、イスラム圏社会・文化論の 4 部門からなり、これまで、アラブ、トルコ、イランおよび旧ソ連地域の研究を志す学生を受け入れてきました。現在のスタッフは、木村喜博（教授、大学院環境科学研究科と兼務）、北川誠一（教授）、黒田卓（助教授）、大河原知樹（助教授）の 4 名、および客員教授として中央大学総合政策学部のもじゅたば・サドリア先生をお迎えし、総合演習とヒューマン・セキュリティ・コースの講義担当をお願いしています。

研究科が位置する仙台市青葉区川内は、広瀬川の西、市内を睥睨する青葉山の麓にあり、仙台城の敷地内です。市内の槻並木や構内の新緑をお楽しみ下さい。

（第 23 回年次大会実行委員会事務担当 北川 誠一）

開催日時：2007 年 5 月 12 日（土）～13 日（日）

開催場所：東北大学川内キャンパス・マルチメディア棟（宮城県仙台市青葉区川内 41）

第 10 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1)」

教育現場の中での中東・イスラーム」迫る

日本中東学会は、本年度も文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて、2 度の公開講演会を開催いたします。

これまで毎年1回開催してきたこの講演会は、学会としての社会貢献をめざしたものであり、一般の方々に発信する大事な機会です。

今年は、生活の身近なところにある中東・イスラームとの関係を掘り起こすことで、私たちの中東・イスラーム認識を洗い直す新たな試みを企画いたしました。間近に迫った本年度第1回の講演会では、全国歴史教育研究協議会の協賛を得て、「教育現場の中での中東・イスラーム」をテーマに講演とパネル・ディスカッションを行います。

2001年9月の米国同時多発「テロ」事件以来、アフガニスタン、イラクと続いた中東での戦争は、この地域が今日の国際情勢のなかに占める重要性をあらためて世界中に認識させました。しかし、多くの日本人にとって中東は相変わらず世界で最も「遠く」感じられる地域のひとつであり続けています。その原因はどこにあるのでしょうか？

他方、中東から遠く離れたこの日本でも、日常生活のレベルにおいて、新聞やテレビやインターネットあるいは学校教育のなかで、中東との接触が進み、多くの情報と知識が蓄積されています。本講演会では、中東研究者、教員、報道やNPO関係者が集まり、身近な中東関係の情報と知識を発掘・検証しながら、学校教育における中東・イスラームの姿について考えます。

どうぞ、お誘い合わせの上、おいでください。会員の皆様の積極的な参加をお待ち申し上げます。プログラムは下記の通りです。（企画担当理事 加藤 博）

* * *

第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす (1) 教育現場の中での中東・イスラーム」

日時：2006年7月25日（火） 午後2時～6時
（開場 午後1時30分）

場所：明治大学アカデミーコモン会議場

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

（JR 中央線・総武線「御茶ノ水」駅、地下鉄丸の内線「御茶ノ水」駅または千代田線「新御茶ノ水」駅下車）

講演：酒井啓子（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）

「イラク：ニュースのむこうになにを見るか」

パネル・ディスカッション：「報道と教育の現場から」

松本高明（東京都立豊島高等学校教諭）

川上泰徳（朝日新聞編集委員）

田中好子 (NPO パレスチナ子どものキャンペーン)

三浦徹 (お茶の水女子大学文教育学部教授)

司会：加藤博 (一橋大学経済学部教授)

* なお、本講演会は、平成 18 年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費による補助をうけて、開催されます。

会則改正のお知らせ

今次の総会では、2000 年の総会以来、6 年ぶりに会則の改正をおこないました。また、1999 年に制定された細則について、はじめての改正をおこないました。その趣旨は、発足以来 20 年を経て、本学会が創立時と比べて、会員数 2 倍以上、年報投稿者 2 倍以上、年次大会発表者 4 倍以上という大きな拡大、発展を遂げてきたことに対応して、組織を改革することになりました。また、時代状況の変化に対応する改正も、あわせておこなうこととなりました。

改正の主たるポイントは、(1) 理事会 (理事数) の拡大、それに伴う評議員数の拡大、(2) 国際交流委員会の設置、(3) 財政の安定をめざす会費の改定、の 3 つでした。数年にわたる討議や検討をふまえ、昨年 5 月の理事会で合意された「十分な討議を経て、会則・細則を改正する」という方針に基づき、理事会での原案の討議、本年 1 月発行ニューズレター (106 号) での会員への告知と追加提案の募集などを経て、今次総会で最終的な改正案を提案し、ご賛同をいただくことができました。

ご協力をいただいた皆様に深謝申し上げるとともに、本学会のさらなる発展のために、いっそうのご支援をお願いする次第です。

以下に、改正の内容とその説明を記します。

< 会則 >

旧	新 (改正後)
第 6 条 本学会に次の役員をおく。(1) 会長 1 名 (2) 評議員 若干名 (3) 理事 若干名 (4) 監事 2 名	(変更なし: 具体的な人数は細則で定められる)
第 7 条 会長は本学会を代表し、会務を総括する。評議員は会長の諮問に応じる。理事は本学会の事業の運営にあ	(変更なし: 具体的な人数は、理事会の委嘱による。)

たる。監事は会計を監査する。なお会務遂行のため委員若干名をおくことができる。	
第 8 条 (1) 会長は理事の中から、互選によって定める。(2) 評議員は一般会員の中から、正会員の投票により選任する。(3) 理事は評議員の中から、互選によって定める。但し、理事会は会員の中から特定の任務など必要に応じて理事若干名を追加することができる。	(変更なし:具体的な数は理事会の決定と総会の承認による。慣行的にはおおよそ 2 名。)
第 10 条 本学会は会務を遂行するため、事務局と編集委員会を置く。	第 10 条 本学会は会務を遂行するため、事務局、編集委員会、国際交流委員会を置く。
第 11 条 (旧第 11 条を第 12 条に移行)	第 11 条 (新設) 本会則の実施のために、別に日本中東学会細則を定める。
第 11 条 本会則の改廃は、総会の決議をうるものとする。	第 12 条 本会則および細則の改廃は、総会の決議をうるものとする。

< 細則 >

旧	新 (改正後)
<p>・会員について (1~3 省略) 4. 休会 休会は海外赴任者と海外留学者に限る。但し、期限を必ず申告するものとする。</p>	<p>・会員について (1~3 省略) 4. (廃止)</p>
<p>・会費について 1. 正会員は年額 8,000 円、学生会員は年額 4,000 円を納入するものとする。また、賛助会員は一口 50,000 円 (原則 2 口以上) を納入するものとする。 2. (省略) 3. 振込手数料 ・会員の負担とする。海外からの送金は International Money Order を利用する。銀行を利用する場合は受け取り手数料が最低でも 1,500 円かかるので、送金者がこれを負担するものとする。</p>	<p>・会費について 1. 正会員は年額 10,000 円、学生会員は年額 5,000 円を納入するものとする。また、賛助会員は一口 50,000 円 (原則 2 口以上) を納入するものとする。 2. (省略) 3. 振込手数料 ・会員の負担とする。海外からの送金は International Money Order を利用する。銀行を利用する場合は、受け取り手数料も送金者が負担するものとする。</p>

<p>___.(現行規定を ___に移行)</p>	<p>___ .国際交流委員会について(新設) <u>1. 理事会は、国際交流に関わる活動をおこなうため、国際交流委員長を任命し、また国際交流委員若干名を委嘱する。国際交流委員長および国際交流委員は国際交流委員会を構成する。</u></p>
<p>___ .役員選挙について 1. 理事会指名による4名(監事1名を含む)が選挙管理委員会を構成するものとする。選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。 2. 選挙によって<u>評議員 50名以内、理事 9名を選出するものとする。</u> 3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。</p>	<p>___ .役員選挙について 1. 理事会指名による4名(監事1名を含む)が選挙管理委員会を構成するものとする。選挙管理委員会は、評議員、理事の選挙を実施・管理するものとする。 2. 選挙によって<u>評議員 60名以内、理事 13名を選出するものとする。</u> 3. 同点の場合の選出法は、抽選によるものとする。</p>
	<p>___ .附則 <u>本細則は制定・改正日より施行されるが、 ___-1(会費)の改正は2008年度分より適用されるものとする。</u></p>

追加説明：

(1)従来、細則は会則に明記されていないため、内規の扱いでしたが、今回は会則に明記し、改廃についても総会の決議によるものとししました。

(2)細則 -3 の、振込手数料の項目は、これまで、受け取り手数料が1,500円というような、正規の細則になじまない具体的な手数料の推定額を示していましたが、細則が内規から「格上げ」となりましたので、表現を改めました。

(3)細則 -2 に、「編集委員会と学会事務局について」という記載があります。編集委員会と学会事務局の関係は、会務運営の実情に応じて多少変化しています。今回は、この項目を改正してもあまり意味がないと思われましたので、改正は見送りました。実体的に弾力的に運用されていればよいと思います。同じ理由で、新設された国際交流委員会については、「国際交流委員会と学会事務局について」という項目を設けませんでした。

(4)理事数は、理事会の実務負担の現状、規模の似た他の学会の理事数などをふまえて、新しい数に増員しました。評議員数は、旧規定からおおむね「理事数の

5倍程度」が目安と考え、また、70だと開票作業が大変になるというご意見がありましたので、それを勘案して、60としました。なお、特任理事（会則第8条）は、慣行的に2名程度となっています。本学会は選挙を通じて理事を選出して自らを治めていますので、今後も、特任理事の数については従来の慣行程度が適切かと思われます。理事数、評議員数の改正は、1年前に成立した今期には遡及されませんので、次の選挙から適用されます。

（5）会費の改正は、近年の財務状況を精密に検証した結果の提案でした。補助金を含めてようやく収支が均衡している状態は、ひとたび補助金が不採択になれば赤字に転落することを意味します。そこで、補助金に依存せずに収支が均衡する状態をめざして、創設以来はじめての会費改定をお願いしました。なお、新しい会費の適用は、会員の皆様にも事務局にもわかりやすいように「2008年度分より」と附則で明記しました。つまり、来年5月の大会に来て翌年度分を前納する際から、新会費となります。今年度に来年度の分を前納する場合は、従来通りです。

（6）お詫びとお願い：一箇所、改正し忘れた箇所があります。それは、「細則-1 会員の手続き」で、現行規定では「入会、諸変更、休会、退会届は必ず提出することとする」となっています。今次の改正で、海外滞在者の休会規定は中東との連絡がとりにくかった時代のもので、しかも休会になると連絡先不明になることが多いため、「細則-4 休会」を廃止しました。それにもかかわらず、この手続きの項目で「休会」の語が残ってしまいました。全く単純なミスで、まことに申し訳ありません。深くお詫び申し上げます。つきましては、来年度の総会であらためて改正を提案いたしますが、それまで暫定的に年報等に掲載されている細則から「休会」の語を削除させていただきたいと思います。厳密に言えば、来年改正してから変更すべきですが、ミスのまま掲載している方が会員や入会希望者に対して誤った情報を与える害が大きいと思われるので、このような例外措置をとらせていただきます。ご寛恕の上、ご了承ください。

（会則改正担当理事 小杉 泰）

理事会・総会報告

【第1回理事会報告】

5月13日（土）東京外国語大学海外事情研究所において2006年度第1回理事会が開催されました。概要は以下の通りです（議題の詳細については9～13ページ

ジの総会報告をご参照ください)。

出席：三浦徹会長、赤堀雅幸、飯塚正人、臼杵陽、加藤博、栗田禎子、小杉泰、
小松久男、酒井啓子、長沢栄治、林佳世子の各理事
事務局より宇野陽子学生会員

[議題]

1. 2006年度事業計画について
2. 会則改正について
3. AJAMESの2006年度編集計画について
4. 国際交流委員会の活動について
5. 2006年度公開講演会及び学校教育における中東理解推進プログラムについて
6. 2005年度決算報告、2006年度予算案
7. 会員動向
8. 2007年度年次大会について
9. その他

【日本中東学会第22回年次総会報告】

日時：2006年5月13日(土)

場所：東京外国語大学 マルチメディアホール

出席者：60名、委任状提出132名、計192名(定足数139名)

太田敬子会員の司会により、議長として湯川武会員、書記として青山弘之、岡本久美子両会員、議事録署名人として店田廣文、澤江史子両会員が選出されました。理事会によって提出された以下の議案が審議され、いずれも採択されました。

1. 2005年度事業報告

飯塚正人事務局長から概要報告が行われた。

- ・ 第21回年次大会の開催(2005年5月14日～15日、国立民族学博物館)
- ・ 第9回公開講演会「中東と日本の間」の開催(2005年11月5日、明治大学リバティホール、文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による)
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第22-1号、第22-2号の編集・出版(日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による)
- ・ アジア中東学会連合(AFMA)第6回大会(2006年5月、東京)開催のための実行委員会組織と開催準備。
- ・ 第2回中東学会世界大会(2006年6月、アンマン)への協力。パネルなどを

組織する方向での準備。

- ・ 韓国中東学会第 14 回国際会議への参加。
 - ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2005」のための照会調査およびデータベースの拡充。同英語版の編集掲載。
 - ・ ニュースレターの発行（和文 4 回〔総頁数 90 頁〕）。
 - ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報（2005 年度登録者数 501 名）。
 - ・ AJAMES の海外機関への発送。
 - ・ AJAMES の国立情報学研究所サイト（NiCII）での掲載。電子ジャーナルとしての公開。
 - ・ 日本中東学会奨励賞の設置（20 周年記念事業）。
 - ・ 日本における中東研究に関する調査及び中東における日本研究に関する調査（国際交流基金委託事業）の実施。
 - ・ 会員数の増減： 入会者 34 名、退会者 13 名 / うち物故者 4 名。結果、2006 年 3 月 31 日現在の会員数は 693 名（正会員 521 名；学生会員 172 名）となった。
2. AJAMES 第 21-1 号、第 21-2 号編集報告（長沢栄治 AJAMES 前編集委員長）
- ・ 21-1 号および 21-2 号が予定通り刊行された。
3. 2005 年度決算報告（飯塚正人事務局長）および監査報告（清水学監事）
（決算については 13 ページの表を参照）
- ・ 滞納年会費の回収は昨年度ほど進まなかったが、複数の機関に AJAMES をセットでご購入いただいた結果、AJAMES 販売代金収入は予算を大幅に上回った。また、予算作成時には想定していなかった国際交流基金委託事業運営管理費が収入に加わった。
 - ・ 支出面では、アルバイト謝金を大幅に節減できた。
 - ・ 消耗品費の大幅超過は主に事務局移転にともなう学会ネーム入り封筒の印刷費による。
 - ・ 繰越金は 2005 年度に比べ約 90 万円増であった。
 - ・ 清水学監事より、山下王世監事とともに会計監査を行い、決算についてはすべて適正であった旨の報告があった後、学会会計の起算日・決算日が年度によって異なっているため、厳密には年度単位の比較ができないことが指摘され、AJAMES 印刷費振込時期等の関係で 3 月末日の決算が困難であれば、企業会計のように債権・債務として会計処理する方向を目指すのが長期的には望ましいとの意見が表明された。

4. 2006 年度事業計画一般について

飯塚正人事務局長から概要が説明された。

- ・ 第 22 回年次大会の開催（2006 年 5 月 13～14 日、東京外国語大学）
- ・ 第 10 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1)「教育現場の中での中東・イスラーム」(2006 年 7 月 25 日、明治大学アカデミーコモン会議場)
- ・ 第 11 回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(2)「地方における中東・イスラーム」(2006 年 11 月 18 日、山口市民会館小ホール)の開催（それぞれ文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける）
- ・ 日本中東学会年報（AJAMES）第 22-1 号、第 22-2 号の編集・出版を行う（日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける）
- ・ アジア中東学会連合(AFMA)第 6 回大会の開催（2006 年 5 月 13～14 日、東京外国語大学、日本学術振興会から国際研究集会の助成を受ける）
- ・ 第 2 回中東学会世界大会（WOCMES-2、2006 年 6 月アンマン）に協力。パネルの組織（国際交流基金から知的交流会議等開催助成プログラムの助成を受ける）
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2006」（日本語版、英語版）新規業績の調査・更新、学会ホームページにおける公開・維持・更新（文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける）
- ・ ニュースレターの発行。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報。
- ・ 海外の関連学会との交流の促進。
- ・ AJAMES の普及を促進するための電子ジャーナル化。
- ・ 日本中東学会奨励賞の規定作成と授賞選考。
- ・ 第 12 期役員選挙の実施。

（質疑）AFMA 参加費を含むとはいえ、今年度の年次大会参加費が昨年度の倍額になっている理由、また大会当日に参加を申し込んだ場合さらに 1000 円増となる理由について質問があり、これでは実質的に年会費を増額しているようなものではないか、むしろ大会開催費予算を増額して参加費は必要最小限の金額に抑えるべきである、との意見が表明された。これに対し、飯塚事務局長および三浦会長から、年次大会については、30 万円の開催費によって独立採算で運営することにしているため、これまで参加費金額の設定は実行委員会に任せてきた、むしろ実行委員会には会長や事務局長も入っているので意見を表明できるが、今回設定された参加費の額は過去の例に照らしても許容範囲内であったと思われる、また当日参加申込者の参加費を事前振込による参加費と同額にしてしまえば、事前振込をせずに大会に参加する会員が多数にのぼることが予想され、事前振込制の効用

である大会参加者数の把握が困難になるため、当日参加は割り増しとせざるを得なかった、事前振込制の導入によって大会参加者数が事前に把握できれば合理的な大会運営が可能になることは確かなのでご理解いただきたい、他方で大会開催費の増額および大会参加費の徴収方法については今後の検討課題とする、との回答があった。

5. AJAMES 第 22-1 号、22-2 号編集計画（林佳世子 AJAMES 編集委員長：議題の詳細については 36～38 ページの AJAMES 編集委員会報告をご覧ください）

- ・ 編集委員の交代。
- ・ AJAMES 電子ジャーナル化の現況。
- ・ 第 22-1 号、22-2 号特集計画。

6. 2006 年度予算案（飯塚正人事務局長）（予算案については 13 ページの表を参照）

- ・ 収入の部で、2002 年度分、2003 年度分の年会費収入がゼロとなっているのは、「会則細則で除名対象とされる 3 年以上の会費滞納者の会費は年会費収入予算に計上しない」という 2004 年度総会における決定を反映したものである（ニューズレター98 号 5 ページを参照）。昨年度は事務局の不手際から、2002 年度分の年会費収入を計上してしまったが、これは単純なミスであった。陳謝したい。
- ・ 本年度は初めて大会会場費を予算に計上した。
- ・ インターネット広報費が大幅に減額されているのは、05 年度から事務局がインターネット広報も担当することにしたためである。
- ・ 中東文献データベース更新費は、本年度、科学研究費補助金による助成金があるので、最小限の予算計上に留めた。

7. 会則改正

小杉泰会則改正担当理事より、会則・細則改正の背景と経緯、また改正箇所の概要が説明された（議題の詳細については 5～8 ページの会則改正のお知らせをご覧ください）。

8. その他

飯塚正人事務局長から会員名簿発行の隔年化について報告があった。

三浦徹会長からの挨拶があり、以上をもって総会は閉会されました。

第 22 回年次大会報告

【大会プログラム】

- 5月13日(土) 公開パネル、総会(東京外国語大学マルチメディアホール)
- 12:30 受付開始
- 13:30 開会の辞(AFMA 会長 三浦徹)
歓迎の辞(東京外国語大学副学長 宮崎恒二)
- 13:45~16:45 公開パネル(英語)
“The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East:
Experience in China, Korea, Mongolia and Japan”
- 17:00~18:00 日本中東学会総会
- 18:15~20:00 懇親会(学生会館)
- 5月14日(日) 研究発表
- 午前の部 9:30~12:35(休憩 10:55~11:10)
- 午後の部 14:00~17:05(休憩 15:25~15:40)

第1会場

- 1) 今堀 恵美(東京都立大学大学院)
「持参財としての手仕事 ウズベキスタン・ブハラ州カシュタ(刺繍)制作の事例から」
- 2) 河原 弥生(日本学術振興会特別研究員)
「コーカンド・ハーンの系譜書 母系サイドの検討」
- 3) 原山 隆弘(東京大学大学院)
「イブン・ハッスール著『トルコ人の優越』について」
- 4) 大河原知樹(東北大学)
「イスラム法廷史料再考 アーカイバル・サイエンスと<イスラム法廷台帳学>の可能性」
- 5) 小笠原 弘幸(日本学術振興会特別研究員)
「オスマン朝建国説話におけるルーム・セルジューク朝の位置」
- 6) 宮下 遼(東京大学大学院)
「オスマン詩人のイスタンブル 16世紀都市頌歌に見るイスタンブル観」
- 7) 高畑 祥子(東北大学大学院)
「オスマン帝国期におけるミッション・スクールの役割 ロバート・カレッジ学長の回顧録から」

第2会場

- 1) 長岡 慎介 (京都大学大学院)
「現代イスラーム金融における取引契約の考察 ムダーラバ契約, ムシャーラカ契約, ムラーバハ契約を中心に」
- 2) 飯山 陽 (東京女子大学非常勤講師)
「イスラーム法理論およびファトワーにおける公益あるいは公共善としてのマスラハ」
- 3) 前田 君江 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員)
「1946年「イラン・ソ連文化協会作家会議」と新体詩論の展開」
- 4) 西尾 哲夫 (国立民族学博物館)
「誰がために乳房はゆれる ベリーダンスをめぐる身体と言説の現代的変容」
- 5) 大川 真由子 (日本学術振興会特別研究員)
「オマーンおよびザンジバルにおける「アラブ性」 アフリカ系オマーン人のエスニシティをめぐる一考察」
- 6) 縄田 浩志 (鳥取大学)
「スーダン東部, ベジャ族の適応機構と歴史的生存」
- 7) 小杉 麻李亜 (立命館大学大学院)
「文化装置的アプローチからみたクルアーン 人類学の方法論とフィールド調査から」
- 8) 外山 健二 (筑波大学大学院)
「ポール・ボウルズのフランスからモロッコ シュールレアリスムと民族誌学」

第3会場

- 1) 錦田 愛子 (総合研究大学院大学大学院)
「ヨルダン系パレスチナ人におけるディアスポラ・アイデンティティの現状」
- 2) 飛奈 裕美 (京都大学大学院)
「エルサレム旧市街における『パレスチナの』性格の維持 商店と NGO の活動を中心に」
- 3) 鶴見 太郎 (東京大学大学院)
「シオニズムの歴史社会学 ロシア帝国とナショナリズム」
- 4) 小島 宏 (国立社会保障・人口問題研究所)
「欧州在住ムスリムと移民に対する態度」
- 5) 富永正人 (東京外国語大学大学院)
「現代標準アラビア語の語末母音等の脱落について アル・ジャズィーラの

ニュース放送を題材に」

6) Abdul Latif Zoya (首都大学東京大学院)

“The Shaping Factors of the Rapid Urban Change in the Eastern Sector of Old Saida (Lebanon)”

第4会場

1) 関口 陽子 (東京大学大学院)

「トルコの民族主義者行動党 (MHP) 軍事訓練キャンプの虚像と実態 1960年代後半から70年を中心に」

2) 米山 知子 (総合研究大学院大学大学院)

「現代トルコにおけるアレヴィーの宗教舞踏セマーの展開」

3) 宮澤 栄司 (上智大学アジア文化研究所客員研究員)

「トルコのチェルケス人「ディアスポラ」 強制移住から再定着へ」

4) 丸山 英樹 (国立教育研究所)

「トルコの教育改革 EU加盟問題と関連して」

5) 松永 泰行 (同志社大学一神教学際センター フェロー)

「比較視座におけるイラン国家 民主化論, 世俗化論との関わりにおいて」

6) 岩崎 葉子 (アジア経済研究所)

「イラン賃貸借法制度におけるサルゴフリーと haqq-e kasb o pishe o tejarat」

7) 米田 憲市 (鹿児島大学)

「規範としての契約: イラン・イスラーム共和国の大学生の場合 23カ国/地域の国際比較から」

【主催機関から】

大会実行委員長 大塚 和夫 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

日本中東学会第22回年次大会は、2006年5月13・14日の両日、武蔵野の面影が残る府中市の東京外国語大学で開催された。年次大会と並行してアジア中東学会連合 (AFMA) の第6回大会も開催され、双方合わせて300人以上の参加者を見て、盛会のうちに幕を閉じた。

東京外国語大学は1987年の第3回年次大会の開催校であり、当時は北区西ヶ原に校舎があった。それから20年弱、東大も多摩地区に移転し、大学とその周辺の環境・雰囲気は一新した。その間中東地域でも、湾岸危機/戦争、9・11とアフガニスタン攻撃、そして対イラク戦争などを経て情勢も大きく変動した。日本中東学会も若い会員が増え、今では700人を越える大所帯になった。今次大会でも4会場で28の研究発表があった。さらに第1日目にはAFMA主催の英語によ

る公開パネル「アジアの対中東外交を検証する」が開かれ、会員以外の一般参加者も加え大盛況であった。

今次大会では運営に当たり、昨年までとは異なるいくつかを試みをした。参加費・懇親会費の前払いもそのひとつであった。一部の会員の方は戸惑われ、不満ももたれたと思われるが、会員数が増加している年次大会運営をスムーズに進めるための方策として、多くの会員の方のご理解・ご協力をいただいた。また、若い研究者のために託児所の設置も行った。受益者負担が前提であるが、ある会員からの提案で託児所運営のための寄付金を募ったところ、多くの方々から多大な志を頂戴した。これらの新しい試みに対する会員の方々のご理解・ご協力に、この場を借りて改めて篤くお礼を申し上げたい。

最後になるが、準備期間も含め1年ほどの間にさまざまな形でご尽力いただいた年次大会実行委員会、学会理事会、AFMA 実行委員会の皆様、そして当日のアルバイトなどご協力をいただいた学生・院生諸君にも、実行委員長として心からの謝意を表したい。

【公開パネル The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East: Experience in China, Korea, Mongolia and Japan】

アジア中東学会連合（AFMA）第6回東京大会報告（30ページ）を参照。

【研究発表会場から】

第1会場

今堀恵美報告「持参財としての手仕事 ウズベキスタン・ブハラ州カシュタ（刺繍）制作の事例から」は、ウズベキスタンにおけるカシュタ（手織り刺繍）制作の変化と花嫁の持参財の関連性に注目した報告である。カシュタは伝統的に持参財に含まれてきたが、近年カシュタの装飾品を用いない女性も出てきている。他方、独立後、観光向けなどカシュタの商業用生産が増加している。そのなかで、花婿側の周囲の女性にとって評価されるのは、手織り刺繍の持参そのものより、カシュタ技能を習得していることに示される手仕事の器用さや柔順性である。手仕事の技能は持続する収入源としての意味も持っているためである。実証調査をもとに、カシュタの持つ意味が社会的条件の変化に伴ってニュアンスを変えている点に注意が向けられた。

続く河原弥生報告「コーカンド・ハーンの系譜 母系サイドの検討」は、通常「サイド」の系譜が男系であると理解されているにもかかわらず、19世紀初頭の西トルキスタンのコーカンド・ハーンが「サイド」を自称したことに注目する。報告者は、三ハーン国のウズベク部族支配層が、聖裔として血統上「サイド」を自称した根拠に関心を持ち、それとの関係で母系サイドを検討しよ

うとした。報告者がタジキスタンのソグド州で発見した民間所蔵の文書を引用し、母系により「サイド」を主張する史実を掘り起こそうとしたものである。この報告は、当時の西トルキスタンの支配体制とその社会の構造の史的研究を深化させる可能性を示唆したものであろう。（清水 学）

原山隆広氏の報告は11世紀半ばに書かれたイブン・ハッスールの『トルコ人の優越』という書物の全体像を理解したうえで、その叙述から当時の政治状況を検討しようとするものであった。プワイフ朝の血統問題、トルコ人論、セルジューク家の起源問題という書物の内容に即して先行する諸研究を再検討し、宗派問題やプワイフ朝とセルジューク朝の関係について述べ、この世紀を「スンナ派復興」とする理解に疑問を提起して、宗派以外の要因を検討する必要性を指摘した。

大河原知樹氏の報告は、オスマン朝研究において文書資料が盛んに利用されているが、特にイスラーム法廷台帳自体をアーカイバル・サイエンスの観点から研究する必要性を、氏のダマスカスのイスラーム法廷台帳調査から実例を挙げて示し、個々の事例がどの法廷のものであるのか、また台帳に記載されるのはどのような種類のものであるのかを報告した。時代的変遷や地域的な偏差など多くの課題があるが、資料の性格を確定するためにも必要な作業である。（菊池 忠純）

小笠原弘幸氏の報告は、オスマン朝の起源をめぐる問題を、ルーム・セルジューク朝との連続性を示唆する言説を取り上げて考察したものである。その結果、ルーム・セルジューク朝との紐帯を強調する言説は16世紀末以後縮小し、イスラーム的価値観を表象する言説が増加したことが明らかにされた。テーマは氏が数年来取り上げてきたものであるだけに、先行研究をふまえた手慣れた報告であった。発表後の質問でモンゴルとの関係が示唆されるなど、このテーマの奥行きが深さが浮き彫りにされた。ただ、考察のキーポイントが「言説」という微妙な点に置かれているだけに、扱われた史料の言語学的・文献学的説明がもう少し欲しかった。

宮下遼氏の報告は16世紀の詩人ラティーフィーの『イスタンブル礼賛』の分析を中心に、「都市頌歌」と呼ばれるジャンルの文学作品を歴史研究、とりわけ社会史・心性史研究の分野に応用するという最近流行の手法を駆使した意欲的な発表であった。こうした作品から詩人のイスタンブルに対するイメージ、そこから抽出されるかれらの心性が紹介された面は興味深かったが、「都市頌歌」と他の文学作品との関連など、いわば史料批判に関わる側面の説明がもう少し欲しかった。全体として、まだ最初の試みという域をでなかったとはいえ、斬新な視野による挑戦として受けとめたい。

高畑祥子氏の報告は、オスマン帝国におけるミッション・スクールの役割を、ロバート・カレッジの学長を務めたジョージ・ワッシュバーンの活動とブルガリア人学生の存在とに焦点を据えて明らかにしようとしたものである。ワッシュバ

ーンが、オスマン帝国をとりまく列強に情報を提供、またみずからブルガリアを訪れるなど、ブルガリアの独立にきわめて大きな影響を与えたこと、そのためかこの学校には多数のブルガリア人が在籍し、卒業後ブルガリアで重要なポストを占めたことが明らかにされた。ただし、当時の帝国各地に存在したミッション・スクールの役割を考える中でこの学校がどのように位置づけられるのだろうかという疑問が残された。(永田 雄三)

第2会場

長岡慎介氏の発表「現代イスラーム金融における取引契約の考察 ムダーラバ契約、ムシャーラカ契約、ムラーバハ契約を中心に」は、原則として利子付きの融資を禁じているイスラーム法の下で、現実に存在しているイスラーム金融の実態とその理論的背景を探ろうとした、野心的なものであった。現実には利子付き金融であるムダーラバ契約の原理の説明と、それをめぐる法理論の紹介からはじまり、イスラーム経済の論理を多角的に探る試みで、経済学の理論とイスラーム法の論理との絡み合いの説明は説得力があった。一方、イスラーム金融機関とよばれるものがイスラーム世界の経済活動の中でどの程度の比重を持って存在しているかなどの、現実の側面には言及がなく、いささかさびしかった。

飯山陽氏の報告「イスラーム法理論およびファトワーにおける公益あるいは公共善としてのマスラハ」は、法理論としての公益あるいは公共善の検討からはじまる。つづいて、イスラーム法理論におけるマスラハの概念を、何人かの法理論家の著作から探る。さらに、マーリク派のファトワー集から、マスラハの概念の具体的な事例を抽出する。結論として、マスラハを公益あるいは公共善と理解しても大過ない、とする。発表者の議論の運びは、それなりに論理的で、説得力があった。しかし、公益なり公共善の概念は、西欧を基準とした法理論だけではなく、広く世界に存在するものなのだから、より広い視野で論じることの必要性もあるのではないかと、とも思った。(後藤 明)

西尾哲夫「誰がために乳房はゆれる ベリーダンスをめぐる身体と言説の現代的変容」は、世界各地のプロ、アマのダンサーに対するインタビュー映像を資料として使い、ベリーダンスが世界に広がっていく中で受ける変容、とくにそれを取り巻く言説の変遷をたどったものである。本来、アラブの芸能であるベリーダンスが、アラブ以外の人々にどのように受け止められているのか、あるいは非アラブ世界で活躍するアラブ人ダンサーにとって、ベリーダンスはどのような意味づけをされているのか等について、多様な例が紹介された。なかでも、ダンスとともに演奏される歌の(アラビア語の)歌詞の重要性が指摘され、身体儀礼としてのベリーダンスに、排他性をもたらす可能性と解釈されたのは興味深かった。

なお、予定されていた前田君江氏の発表は、発表者の都合により中止となった。

(八木 久美子)

大川真由子氏の発表「オマーンおよびザンジバルにおける「アラブ性」
アフリカ系オマーン人のエスニシティをめぐる一考察」は、題目にある「アラブ」
という中東研究に共通の関心もあってか、会場の半分以上の席がうまる盛況であ
った。発表者のフィールドワークにもとづくデータが示され、当該の人びとにお
いて表象される「アラブ性」が説明された。発表者の口述の速度についてゆく大
変さがあったが、用意されたレジュメと要旨集から内容をふりかえってみると、
副題にある「考察」の発表だったのではなく例示報告の発表であった。質疑応答
で、他の中東地域で現れる「アラブ」と対照するとどのような対比があるのかと
いった発言があったが、まさに議論がひろがるテーマの発表であった。

一方、縄田浩志氏の「スーダン東部、ベジャ族の適応機構と歴史的生存」は、
牧畜を主たる生業とするベジャ族がその生態的環境においてどのように生きている
のか、フィールドワークによる詳細なデータと文献資料を照合させての報告で
あった。この点で、またPC(パワー・ポイント)の活用による簡潔明解な内容提
示から完成度の高い発表であった。中東におけるベジャという存在は、地域や時
代の観点からは「周縁」に位置するのかもしれない。しかし、ベジャが生産する
ラクダが中東の広域ネットワークにのっているとの報告によって、周縁における
「中心性」があきらかにされた。会場は聴衆が一気に減って10数名となった。と
ころがどっこい、質疑応答で「この発表だけのために大会に参加した」と質問に
たつ参加者がいて、ここにも周縁における「中心性」の熱気が漂っていたのであ
る。(奥野 克己)

小杉麻李亜の発表「文化装置論的アプローチから見たクルアーン 人類学
の方法論とフィールド調査から」は、これまでさまざまな方向から研究されて
きたクルアーンを対象に、ブルデューのプラチック概念を援用しながら、「文化装
置論的アプローチ」を提唱する意欲的なものである。最初にクルアーンの研究史
を概括し、そこに潜む方法論的限界を指摘した後に、「文化装置論的アプローチ」
を紹介する。次に事例分析として、フィールド資料に基づき「祈り」とくに「礼
拝」を取り上げた。結論として、事例分析からフクムとヒクマが支え合ったとこ
ろに成立する行為としてプラチックを位置づけ、礼拝におけるクルアーンの具現
化を明示し、クルアーン総体はカノンではなくポテンシャルであることを指摘し
た。理論的に生硬な部分があるが、今後の展開が期待できるアプローチである。

モロッコに移住し、そこで亡くなったアメリカ人作家、ポール・ボウルズの研
究者である外山健二による「ポール・ボウルズのフランスからモロッコ シュ
ールレアリズムと民族誌学」は、1929年にアメリカからフランスに渡ったボウル
ズがそこで出会ったシュールレアリズム運動にまず焦点を当て、シュールリアリ
ズムと民族誌学(「人間博物館」なども含む)の密接な関係を指摘する。さらに、

モロッコのリーフ戦争におけるフランスの立場に反対したシュールリアリストたちがマルクス主義的傾向に進んだことも示し、これらの動向とボウルズの作品との関係を分析する。シュールリアリズム、民族誌学、モロッコに対するフランス植民地主義など、今日では異なった分野で論じられているこれらの事象の興味深い連関が、作家ボウルズに影響を与えたのである。（大塚 和夫）

第3会場

第3会場午前の前半は、異郷にある48年難民とイスラエル占領下の住民とにおける「パレスチナ人」アイデンティティについての二報告がなされた。錦田愛子「ヨルダン系パレスチナ人におけるディアスポラ・アイデンティティの現状」は、故郷を知らない難民新世代に焦点を当て、彼らが結婚の相手選びや相互訪問などを通じて昔ながらの親族意識の広がりの中に身を置きつつイスラエル占領下の故郷と往還するうちに、「親族」や「親類」という意識は「縁戚ネットワーク」的なものへと変化し、新世代難民の「パレスチナ人」意識は故郷を媒介せずに「隣人的つながり」を通じて形成されているとの事態が聞き取り調査を通じて指摘された。

一方、飛奈裕美「エルサレム旧市街における『パレスチナの』性格の維持」は、東エルサレム旧市街のアラブ商店や住民の窮状改善にとりくむNGO活動に着目し、旧市街のイスラーム・アラブ的外観の維持、失業・貧困・教育の遅れ・税金滞納等々に追い込まれた住民が姿を消すのを福祉対策を講じて防止する取り組み等々を紹介する。報告者は、これらの活動を占領権力の住民排除の圧力に抗しての「住み続ける」という戦略的取り組みであると位置づけ、そこに「パレスチナの」性格を指摘した。だが「イスラーム・アラブ的」保全がなぜ「パレスチナの」なのかとの質問が出され、報告者の言わんとする「パレスチナの」が不明確であり、更なる検討が要請された。会場はほぼ満員で、二報告への関心の高さを物語っていた。（藤田 進）

鶴見報告はシオニズムを多民族のロシア帝国の文脈で位置づけなおそうという試みであった。「ウガンダ論争」を契機に、ヘルツルに代表される「西欧ユダヤ人」に対する「東方ユダヤ人」のヘゲモニー奪還として現在のシオニズムの原型が形成されると論じる。シオニズムをそれぞれの地域的偏差の中で具体的に議論していく方向性は中東地域におけるイスラエルの位置づけを考えるためにも重要であり、今後、イスラエルという「場」でそのような作業がいかなる意味をもつのか報告者に課せられた課題であろう。

小島報告はヨーロッパ諸国におけるムスリムの移民に対する態度が他の宗教をもつ者や宗教をもたない者とどのように異なるかをマイクロデータ（21カ国の約4万ケース）に基づいて分析したものであった。司会者が統計学的手法に関して無

知であり、理解できなかつた点が多々あり、要点を要領よくまとめて紹介できないのは心苦しいが、むしろ今後、日本中東学会という地域研究の学会がディシプリンに基づく個別の地域研究の成果をどのように受け止めるかという具体的なケースを小島報告は示していると思われ、むしろその意味で重要な問題提起になったと考える。(臼杵 陽)

富永正人氏は、現代標準アラビア語においてもしばしば発生する語末母音の脱落現象について、国際衛星放送アル・ジャズィーラのニュース番組(2005年11月2日から8日にかけて)を調査対象として発表した。アラビア語を母語とし、現代標準語の正しい運用を規範として意識していると想定される報道関係者が、ニュース原稿を「読む」場面、アラブ人同士で「話す」場面、同時通訳を介して「話す」場面に分け、全部で6,237にも上るケースの分析結果が提出された。それぞれの脱落頻度40%、81%、66%という顕著な差について、品詞や格などの観点から多角的な検討がなされた。質疑においても高度に専門的な議論がなされた。

Zoya Abdul Latif 氏の“*The Shaping Factors of the Rapid Urban Change in the Eastern Sector of Old Saida, Lebanon (1875-1935)*”は、レバノン南部の港湾都市サイダー(シドン)の旧市街の近代における発展過程を、現地調査や都市史の分析などを通じて、建築史の観点から綿密に検討した。当該旧市街は、地中海に向かって突き出た三角に近い形状であるため、拡大の方向は陸側の一边をなす東側のみに限られた。南北に約750メートルにわたって広がる旧市街東側区域について、建築物の逐一の調査によりその建造・改修年代が特定され、また建築物やその周辺の空間の機能がどのように変化したかが分析された。その結果、当該年代の統治者側と地元の商人たちによる諸々の相互作用が、市街区域拡大の原動力となったことが明らかにされた。(黒木 英充)

第4会場

関口陽子氏の発表「トルコの民族主義者行動党について」は、トルコの極右・民族主義政党として知られる民族主義者行動党が60~70年代に反共テロ活動のために組織していたとされる軍事訓練キャンプの実態を、当時のメディアによる調査レポートや党資料などの分析から再検討し、従来の軍事訓練キャンプ像はやや誇張されていると結論した。関口発表は、さらに当時の同党の民族とイスラームに関する言説や、当時のトルコの右派概念にまで踏み込んで論を展開した意欲的なもので、今後フィールド調査として関係者に直接話を聞くには、相手が相手だけにかかなりの困難が予想されるが、重要な研究テーマであるので、今後のさらなる研究の進展を期待したい。

米山知子氏の発表「現代トルコにおけるアレヴィーの宗教舞踊セマーの展開」は、トルコのアレヴィーズムにおいてセマーが持つ意味を検討したもので、セマ

ーを見せる場によって「宗教的アイデンティティの確認(信仰表現)」と「文化的イベント、商品(見せ物)」との間でその受け取られ方が変化するとした。会場からは、セマーを行わないアレヴィー団体も存在するので、アレヴィーズムにおけるセマーの位置づけにはこうしたアレヴィーについても考慮する必要があるとのコメントが寄せられた。個人的には映像などが少しでも紹介されるともっとよかったと思う。

両氏の報告の後にも、現代トルコに関する報告が続いていたが、現代トルコ研究の層の着実な広がりを実感したセッションだった。(粕谷 元)

宮澤栄司氏の報告「トルコのチェルケス人『ディアスポラ』 強制移住から再定着へ」は、ディアスポラが「強制移住」と「再定着」の二つの側面を併せ持つ概念であることに注目し、根無し草的存在だったトルコのチェルケス人が祖国コーカサスからの移住を含む自民族の歴史の主体的な作り手となることで、移住先に新たなホームを再生し根を張るまでの過程を明らかにした。分析概念の説明と調査事例の分析がバランスよく配置され、内容の濃い充実した報告だった。質疑応答では、チェルケス人が自民族の経験を「追放」(sürgün)と表現することについて、ディアスポラ概念をあてはめる際の留保の必要性などが指摘され、終了後も会場外で報告者を囲んで熱心なやりとりが続いた。

丸山英樹氏の「トルコの教育改革 EU 加盟問題と関連して」は、これまで EU 加盟を大義名分として推進されてきた教育改革の限界を指摘するきわめてタイムリーな報告であった。トルコでは公教育が世俗主義体制維持の装置として機能する一方、現在 EU が要請している民主化・分権化改革は公教育のそうした機能を失わせかねず、世俗主義勢力は世俗主義体制の維持が EU 加盟の実現かというジレンマに陥っているという。公教育をめぐる政治に触れる興味深い議論であるが、最後は時間不足で駆け足になってしまった。詳細な統計的データの提示や教育制度の概説を多少犠牲にしても、結論部分の議論をもっと聞きたいという感想をもった。(村上 薫)

第4会場の午後の3つの発表は、いずれもイランに関する社会科学的なアプローチであり、政治学、経済学、法社会学のそれぞれの立場から現代イランの国家・社会の実相に迫ろうとする興味深い内容であった。

松永泰行「比較視座におけるイラン国家 民主化論、世俗化論との関わりにおいて」は、ホメイニーによって規定されたイスラーム国家統治論と改革派の論客サイド・ハッジャーリヤーンの「世俗化」論との摺り合わせによって現段階におけるイラン国家体制の特質と問題点を浮き上がらせようとするものであり、その刺激に富んだ議論は会場からも活発な議論を誘発した。革命後のイラン国家に関する議論はその根本規定の部分から未だに議論されるべき多くの点が残されているとの感が強く、松永氏の研究の今後の進展に注目していきたいと思う。

岩崎葉子「イラン賃貸借法制度におけるサルゴフリーと営業権」は、元来商業施設に生じる高額の使用権を意味していた「サルゴフリー」が米国人ミルスポーの助言による欧米法の「暖簾概念」の導入によって1950年代以降大きく変質し、全体的には地主の所有権を制限するような方向で現在までその内容を変えてきたとし、議会議事録等を資料に用いてその変容過程の詳細な検討を行なった。会場からはワクフ地における使用権との連続性を問う質問があり、この観点からの検証がなお必要であるとの印象を受けた。

米田憲市「規範としての契約 イラン・イスラーム共和国の大学生の場合」は、報告者が2002-2003年にテヘランの大学生1,500人に対して行なった契約意識より厳密には契約遵守に関する意識調査の結果を既存の法意識国際比較研究会(代表・加藤雅信)の22カ国調査の平均結果と比較することにより、イラン人の契約意識の特質を浮かび上がらせようとした。革命後のイランでは統計手法を用いた外国人による社会調査自体が珍しく、近い将来において調査結果全体の比較分析と公開が期待されるところである。(鈴木 均)

【日本中東学会第22回年次大会決算報告】

収 入	(円)	支 出	(円)
大会運営費(中東学会より)	300,000	発表報告要旨集印刷費	138,401
大会参加費(事前振込157名、 当日払い103名)	606,000	郵送費(大会プログラム等)	79,530
弁当代(99名)	79,200	弁当代	93,750
懇親会費(159名)	805,000	懇親会費	686,000
書店からの御寄付(穂高書店、 ビブリア、明石書店、索文社)	40,000	吊り看板代	36,750
		大会会場費	14,400
		アルバイト謝金	293,000
		消耗品費(文具・傘袋・ゴミ袋)	21,819
		飲み物・茶菓・紙コップ代	16,519
		振込手数料	735
計	1,830,200	計	1,380,904
		収支差引残高	449,296

【日本中東学会第22回年次大会託児所決算報告】

収 入	(円)	支 出	(円)
託児所への寄付	49,500	ベビーシッター代	23,065
受益者負担(3名)	6,000	振込手数料	420
計	55,500	計	23,485
		収支差引残高	32,015

* 大会残高 449,296 円、託児所残高 32,015 円は、2005年7月3日付で日本中東学会事

務局に送付済。

【理事会より】

今回の大会では、事前参加申し込みによって予算の効率的運営を行ったうえに、予想をこえる当日の参加者があり、大幅な黒字が計上されました。これをうけ理事会では、年次大会の決算に黒字（余剰金）が出た場合、今後はそれを一般会計には組みこまず、次回以降の大会積立金として別途管理していくことを決定いたしました。近年、東京圏での年次大会は 200-250 名の参加者があるのに対し、東京・関西圏以外での開催の場合は 150 名程度の参加者に留まるため、大会運営が財政的に厳しくなります。このような不均衡を是正するため、年次大会の余剰金は年次大会に還元することとし、来年度以降の年次大会で参加者数の不足等の理由により赤字が出た場合には、この積立金から補填いたします。

また、託児所に関する会計についても同様の措置を採り、余剰金は託児所運営積立金として一般会計とは別に管理し、今後の大会時における託児所運営に還元することといたします。

アジア中東学会連合（AFMA）第 6 回東京大会報告

5 月 13-14 日の 2 日間、第 6 回アジア中東学会連合大会が「東アジアからみた中東」をテーマとして開催された。

アジア中東学会連合(AFMA)は、1995 年に韓国中東学会、中国中東学会、日本中東学会の 3 機関によって設立され、2004 年にはモンゴル中東学会が加盟した。韓国、中国、日本それぞれの中東学会が 2 年交替で会長と事務局を務め、2005 年より日本中東学会が AFMA 事務局を担当しているが、今回は、日本学術振興会の助成と東京外国語大学の後援をえて開催される大規模な国際会議となった。

1 日目は「アジアの対中東外交政策を検証する 韓国・中国・モンゴル・日本の経験から」を主題にした公開パネルが開催された。本パネルには、片倉邦雄元駐イラク、エジプト大使のほか、中国中東学会副会長で中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所所長の楊光氏、韓国中東学会会長でユダヤ研究の第一人者であるチェ・チャンモ氏、モンゴル中東学会会長で商業経済校学長のニヤムザグド・スフラグチャー氏を迎え、アジア諸国の対中東政策のありかたを論じた。各パネリストの報告に加えて、東京大学の韓国政治研究者である木宮正志氏および駒澤大学の中国外交研究者である三船恵美氏、東京外国語大学客員教授のザフラー・ターヘリ氏からの鋭い質問とコメントが提示され、会場には 100 人を超える聴衆

が集まった。

翌 14 日は参加各国の中東研究者により計 25 の研究報告が行なわれた。特にイスラーム運動の東南アジアへの広がり进行分析した報告や、韓国・中国におけるユダヤ人社会を分析した報告などに多くの関心が集まり、参加者が 50 人以上に昇ったパネルもあった。参加者のいずれも、大会での意見交換、学術交流にたいへん満足した様子で、今後より積極的にアジア諸国間の中東研究交流を勧めていくことを互いに約束しつつ、大会は無事終了した。

なお大会に際しては、AFMA 大会実行委員会を組織し、酒井委員長の他、マイケル・ベン(北九州大学)、アレズ・ファフレジャハニ(東京工業大学)が主な委員として準備に当たった。この場を借りて、両委員の尽力に感謝を申し上げたい。また大会当日には、東外大を始めとして多くの学生の協力を得た。特に手伝いに加わった留学生の間から、「議論に刺激を受けた」「国際大会の何たるかを学ぶいい機会だった」との感想を得られたことは、開催の取りまとめを行なった者として、この上ない喜びであった。(AFMA 東京大会実行委員長 酒井 啓子)

【AFMA 理事会報告】

大会の前夜、5 月 12 日にアジア中東学会連合理事会を開催した。加盟 4 団体から 3 名ずつが出席し、つぎの議題を討議・決定した。

出席者：韓国中東学会（CHOI Chang-Mo 会長、KIM Jong Do 事務局長、CHO Hee Sun）、中国中東学会（楊光副会長、張曉東事務局長、肖憲）、モンゴル中東学会（SUKHRAGCHAA Nyamzagd 会長、GANTUMUR Munkhnasan、SAMDANDASH Oyunsuren 事務局長）、日本中東学会（三浦徹会長、臼杵陽、酒井啓子国際交流担当理事）

議決事項：

1. 次期（2007-08 年）の会長・事務局は、モンゴル中東学会が担当する。
2. 第 7 回大会は、2008 年にウランバートルにて開催する。
3. AFMA 発足時に採択した規約について、現在の活動状況に即した見直しを 2007 年度中に行う。(AFMA 会長 三浦 徹)

【大会プログラム】

6th Asian Federation of Middle East Studies Associations Conference

"Middle East Perspectives from East Asia:

Diversifying the Middle East and Islamic Studies"

May 13 (Saturday) Open Panel

13:30 Opening Speech (President of AFMA MIURA Toru)

Welcome Speech(Vice-President of Tokyo University of Foreign Studies
MIYAZAKI Koji)

13:45 ~ 16:45

Open Panel “The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle
East: Experience in China, Korea, Mongolia and Japan”

KATAKURA Kunio (ex-Ambassador of Japan to Iraq and to Egypt)

“Japan and the Middle East: Moving toward a More Proactive
Role”

YANG Guang (Director-General of Institute of West-Asian and
African Studies, Chinese Academy of Social Sciences)

“An Overview of Sino-Arab Relations for the Last 50 Years”

CHOI Chang-Mo (President of KAMES, Konkuk University)

“Searching for the New Partnership between Korea and the
Middle East”

SUKHRAGCHAA Nyamzagd (President of MAMES, Rector of
Institute of Commerce and Business)

“Mongolian Diplomatic Policies on the Middle East”

Commentators: KIMIYA Tadashi (The University of Tokyo)

MIFUNE Emi (Komazawa University)

Zahra TAHERI (Tokyo University of Foreign
Studies)

Chair: SADAMORI Daiji (Asahi Newspaper, Editorial Writer)

18:15 ~ 20:00 Reception

May 14 (Sunday) Sessions

Session 1 & 2 9:30~11:10

Session 3 & 6 11:20~12:50

Session 4 & 7 14:00~15:30

Session 5 & 8 15:45~17:40

Session 1. Urban Non-Elites in Middle Eastern Societies: Three Case Studies from
Istanbul and Cairo between the 17th and Early 20th Centuries

Chair: NAGASAWA Eiji (The University of Tokyo)

Panelists:

AKIBA Jun (Chiba University)

““I Don’t Read or Write”: Life Histories of the Lower Employees at the Ottoman
Şeyhülislâm’s Office “

Hanan KHOLOUSSY (New York University)

“Elite Portrayals versus Subaltern Practices of Marriage in Ottoman Egypt”

YI Eunjeoung (Seoul National University)

“Making Their Voices Heard – Negotiating Power of the Seventeenth-Century
Istanbul Guildsmen vis-à-vis the Government”

Session 2. Middle Eastern Literature(s): From East Asian Perspectives

Chair: OKAMOTO Kumiko (Osaka University of Foreign Studies)

Panelists:

FUKUDA Yoshiaki (Lecturer at Osaka University of Foreign Studies)

“Turban or Tarbush: That Is the Question”

KIM Jeong A (Hankuk University of Foreign Studies)

“Kitab al-Bukhala’ and Food -Satire on Miser through Food”

SONG Kyung Sook (Hankuk University of Foreign Studies)

“A Crisis in Contemporary Palestinian Literature – the Case of Fadwā Ṭūqān”

Discussant: OKAZAKI Hideki (International Buddhism University)

Session 3. Trade and Economy in the History of the Middle East

Chair: KATO Hiroshi (Hitotsubashi University)

SHIM Ui Sup (Myongji University)

“Trans-Yellow Sea Global Trade during the Middle Ages as an Extension of
Maritime Silk Road to Korea”

MATSUI Masako (Lecturer at Keio University)

“Sadık Rifat Paşa and his Economic Thought: in the Shadow of Free Trade
Treaties in the Mid-Nineteenth Century”

GANTUMUR Munkhnasan (Institute of Commerce and Business)

“The Issue of Current Relations between Mongolia and Middle East Countries”

WANG Lincong (Institute of West Asian and African Studies, Chinese Academy of
Social Sciences)

“Clashings and Communication: the Talas War between the Tang Dynasty and
the Arab and the Spreading of Chinese Papermaking Technology to the West”

Session 4. Comparative Studies on Social Values in the Middle East and East Asia

Chair: Michael PENN (The University of Kitakyushu)

KURODA Yasumasa (University of Hawaii at Manoa) / SUZUKI Tatsuzo (Institute
of Statistical Mathematics)

“East and West Asian and Western Values and Their Structures: An Empirical Assessment”

SAMDANDASH Oyunsuren (National University of Mongolia)

“The History of Islam in Mongolia and Some Current Issues”

KIM Jong-Do (Myongji University)

“Comparative Studies on Proverbs of Koreans and Arabs: Emphasizing on their views of lives”

Session 5. The Middle East and East Asia in Global History

Chair: USUKI Akira (Japan Women’s University)

MARUYAMA Naoki (Meiji Gakuin University)

“Three Asian Nations Support the Zionist Movement”

Michael PENN (The University of Kitakyushu)

“Meiji Japan and Qajar Persia, 1880-1914”

HUANG Minxing (Northwest University)

““Pax Islamica” and “Order of China and Foreign Countries”: The Relations between Abbasid Empire and China in the Tang Dynasty”

Discussant: CHOI Chang-Mo (Konkuk University; President of KAMES)

“Jews in Korea from 1885 to 1945”

Session 6. Islamic Movements, Civil Society and Democracy

Chair: MATSUMOTO Hiroshi (Daito Bunka University)

SAWAE Fumiko (Lecturer at the Osaka University of Foreign Studies)

“Islamic Movements and Their Civil / Public Dimensions: Preliminary Analysis of the Turkish Cases”

JANG Ji-Hyang (Hankuk University of Foreign Studies)

“Islam and Liberal Democracy in the Globalization Era: The Political Implications of Islamic Capitalism in Turkish Muslim Democracy”

ZHANG Xiaodong (Institute of West Asian and African Studies, Chinese Academy of Social Sciences)

“The Democratization in the Middle East after the 9.11 Attack”

Session 7. Nationalism, Ethnicity and Islamic Networks in the Middle East

Chair: KURITA Yoshiko (Chiba University)

XIAO Xian (Yunnan University)

“The Islamic Linkage between the Middle East and Southeast Asia”

OBA Ryuta (Kyoto University)

“Between Kurdish Nationalism and Islam: Reevaluating Said Nursī”

Session 8. Gender in the Middle East

Chair: SAKURAI Keiko (Waseda University)

GOTO Emi (University of Tokyo)

“Popular Preachers and the Hijab: Reasons Behind the "New Veils" in Contemporary Egypt”

CHO Hee Sun (Myongji University)

“A Study on Women's Participation in New Media and its Influences on Social Changes in Gulf Region - focused on Satellite TV”

Discussant: Fariba ADELKHAH (Centre d'études et de Recherches Internationales)

“Women, Pilgrimage and Formation of Public Sphere”

【公開パネル The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East: Experience in China, Korea, Mongolia and Japan】

メディアの世界では日中、日韓摩擦がキーワードになっているが、この日の公開パネルは、対日批判もなく、穏やかで、なおかつ未来志向の議論が繰り広げられた。

当たり前の話ではあるが、別に皮肉を込めて言っているわけではない。エネルギーをはじめとする中東外交の重要性は、アジア各国が共有するものだ。しかも単一の国益に根ざす安全保障観ではなく、アジアとしてのグローバル戦略が必要だ、との見解を皆さんが共有していた。日々の政治を超えた「アジア文明論」の香りを、少なくとも私自身は嗅ぎ取ることができた。

発言時間を厳守していただいた報告・討論者の方々、熱心に耳を傾けて午後の3時間をともに過ごして頂いた聴衆の皆さんには、心からお礼を申し上げたい。

(定森 大治)

【セッション会場から】

Session 1 Urban Non-Elites in the Middle East Societies: Three Case Studies from Istanbul and Cairo between the 17th and Early 20th Centuries

第一の秋葉報告は、オスマン帝国の下級官僚の個人史史料を用いて、出身階層、出身地域との結びつき、識字水準などデータから興味深い社会史のテーマ群を扱った手堅い分析の結果を示した。第二の KHOLOUSSY 報告は、近代エジプトの婚姻訴訟を事例に、社会の各層が利用したシャリーア法廷の文書の重要性を主張し、家族関係と社会的階層化の関係を論じた。第三の YI 報告は、オスマン帝国

下のギルドについて、自治性の欠如といった通説を批判し、未使用の一次資料に依拠してその動態的性格を明らかにした。いずれの報告も新たな史料の利用に裏付けられた高い水準の実証分析によって近世中東の都市社会史の先端的な研究領域の在り処を示す内容であったと言えよう。会場からは、ギルド制度の西欧との比較、非エリートの定義に関する質問などが出され、活発な討論が行なわれた。

(長沢 栄治)

Session 2 Middle Eastern Literature(s): From East Asian Perspectives

1. Turban or Tarbush: That is the Question (FUKUDA Yoshiaki)

衣服の面からみた知識人の近代化の様子を、多くの文人の例をもとに分析していく発表であった。衣服、とくに男性が頭にかぶるものとしては、伝統的なターバンがあるが、西洋の近代化と接したエジプトの知識人たちは、ターバンをタルブーシュ(トルコ帽)に変えていった。ターハー・フサイン、ムハンマド・アブドフ、ナジブ・マハフーズなどの資料写真を提示し、BEFORE(ターバン)、AFTER(タルブーシュ)のはざまを、かれらが「近代」と接した時期とみた。一見してそれとわかる衣服による視点から、近代化というものを考察していった興味深い研究である。また、東アジアとの比較という意味で、明治維新期の断髪にも言及し、日本の近代化の様相のひとつとしての髪型の変化を述べたものである。

2. Kitab al-Bukhala' and Food – Satire on miser through food – (KIM Jeong-A)

9世紀のアラブの文人であるジャーヒズの大著「けちんぼどもの書」(Kitab al-Bukhala')に収められた約200の逸話のなかから、特に「食」にかんするものについて、そこに見られる「けち」への風刺を考える研究である。「食」についてを特にとりあげる意味は、食べ物が口から入ること、そしてその口というのは同時に、言葉を話す器官であるということに着目している。発表では、いくつかの逸話を具体的にあげて紹介し、「けち」がいかに自他ともに対し、食べ物に固執するかを述べ、ジャーヒズの風刺をわかり易く解説した。また同時に、アラビア語で書かれたアラブ文学を翻訳することについて、異なる文化を異なる言葉によって、如何に原典の意を伝えるかの問題提起もなされた。

3. A Crisis in the Contemporary Palestinian Literature – The Case of Fadwa Tuqan – (SONG Kyung Sook)

ヨルダン河西岸ナブルス生まれの女性詩人ファドゥワ・トゥーカーンの詩について、1967年のイスラエル占領を境に、パレスチナの抵抗をテーマにしていたものについて、その変化の様相を代表作から読み解いていくものである。また、戦争をはじめとする、パレスチナをめぐる様々な政治的な動きにともなう変化を、テーマと同時に詩のスタイルからも詳細に分析した。占領下での過酷な生活を余儀なくされた体験から生まれた詩は、パレスチナの人々や活動家に、文学を通し

て影響力を与えた。さらに女性としての視点から、男性詩人があまり取り上げなかった「母」「子供」「孤児」などのテーマでの詩作を行い、フェミニズムの詩人としても、その地位を築いていったことを詳説した発表であった。

(岡本 久美子)

Session 3 Trade and Economy in the History of the Middle East

われわれのセッションは、韓国、日本、モンゴル、中国からそれぞれ報告者を迎えた、AFMA の設立趣旨に沿ったものとなった。4 つの報告はすべて、重要であり、研究の深化が期待されながらも、これまでの AFMA では余り重きを置かれてこなかった、経済関係の報告であった。

SHIM 報告は、中世における海のシルクロードが韓国にまで及んでいたことを論じたものであった。日本の教科書では知られていない、韓国領海域での交易ルートとその担い手たちの紹介は、きわめて新鮮であった。時間が足りなく、もっとその詳細を聴きたいと思った。

松井報告は、19 世紀タンジマート期のオスマン帝国における「自由貿易」の需要を一人の官僚知識人の経済思想を分析することを通して、分析したものであった。その分析は、精緻なものであった。フロアーからの質問にあったように、同時期のエジプトにおける経済思想・政策との比較が望まれる。

GANTUMUR 報告は、現代における、モンゴルと中東との間の貿易事情を整理したものであった。工業がいまだ発展していないモンゴルにおいては、家畜や鉱物資源の輸出によって外貨獲得をめざさなければならない事情が解説された。質疑応答で議論が白熱したのは、内陸国家モンゴルの観光業の将来についてであった。

王 WANG 報告は、8 世紀中葉におけるタラス戦争の結果生じた、製紙技術の西への伝播を、中国サイドから論じたものであった。戦死者などの数に対する中国サイドの見解に興味を持った。また、日本では高校教科書でみられるこの事件が、中国では、大学以前には教えられていないとの指摘は面白かった。

以上、報告の精度や密度において、ばらつきがあるのは、現時点では仕方がない。4 つの報告とも「交流」を扱っており、AFMA 所属研究者の間での研究協力の必要性和可能性を感じさせたセッションであった。(加藤 博)

Session 4 Comparative Studies on Social Values in the Middle East and East Asia

The keyword that would best describe this panel is “innovation.” Each of the three presentations represented research in its early stages, but also research that attempted to cover new ground. This spirit of innovation was very commendable.

The first presentation was that of KURODA Yasumasa and SUZUKI Tatsuzo.

Professor KURODA presented their joint findings. The presentation was entitled “The Major Dimension of Arab Culture in Cross-Language Perspective,” and attempted to discern a linguistic and psychological profile of Arabic-speakers in comparison to English and Japanese speakers. One interesting component of the discussion concerned the tendency toward more emphatic and clear answers in Arabic as opposed to the indistinct and subtle methods in Japanese language and culture. KURODA and SUZUKI concluded that the Arabic-speaking students that they surveyed showed a willingness to learn even from “enemy” cultures if they could use that information to better the circumstances of the Arab world.

The second presentation was by SAMDANDASH Oyunsuren of the National University of Mongolia. She presented a paper called “The History of Islam in Mongolia and Some Current Issues.” Of course, this is a topic about which very little information is available in English or Japanese, and so her overview of the status of Islam in Mongolia was very welcome. We learned that Islam first came to the country in the 13th century, and is now represented by minorities of Kazakhs, Khotons, Uighurs, and Dungans. Of these, Mongolian Kazakhs appear to be the largest and most important group. In recent years, Muslims have gained a new freedom of religion in Mongolia, and this is leading to a cultural and religious revival in the country.

The third and final presentation was that of KIM Jong Do of Myongji University in Seoul. KIM’s presentation was entitled, “A Comparative Study on Proverbs of Koreans and Arabs – Focusing on Their Views of Money.” This interesting paper involved a look at how Korean and Arab social values can be demonstrated through the examination of local proverbs. KIM gave many specific examples of proverbs in both cultures in order to compare and contrast them. In his conclusion, he noted one key difference in the two cultures: Arabs tend to see money as something entrusted to them by God, and thus lay more emphasis on sharing money, but the secular-minded Koreans are less fond of sharing, and more interested in accumulating cash.

Each panelist stayed within their time limits, and so a fruitful question and answer session was conducted at the end. By the time that the end of the period arrived, the audience had exhausted their questions and comments, and everyone could exit with a sense of satisfaction. (Michael PENN)

Session 5 The Middle East and East Asia in Global History

丸山報告は1917年のイギリスによるバルフォア宣言を、タイ、中国、日本というアジア三カ国がユダヤ人を国内に抱えていないにもかかわらず、それぞれの対英の政治的思惑から支持を表明した背景を考察したものであった。タイが非欧

米・非キリスト教国家のうちで最初の支持国であったなど、これまでほとんど知られていない歴史的な事実だからこそたいへん興味深いものであった。

PENN 報告は、1880 年の吉田正春使節団のイラン訪問から 1914 年の英露のイラン占領までの期間の明治期日本とカージャー朝ペルシアとの二国間関係を、二カ国にとって脅威となっていた英露との関係を軸に概観したものであった。日本は日英同盟締結と日露戦争の勝利というかたちで乗り切るが、日本・イランの外交交渉は失敗に終わる。日本が当時のイランをどのように見ていたのかといった報告者の問題関心のあり様は、現在の状況を踏まえるとたんに歴史的出来事で済まされない重要な問題提起を含んでいる。

黄 HUANG 報告は唐朝という中華帝国とアッバース朝というイスラーム帝国との関係を文明圏の接触と国際的秩序の形成という観点から概観したものである。とりわけユーラシア大陸における東西貿易と文化交流を担ったシルクロードの争奪戦は中国、アラブ、中央アジア、インド、ヨーロッパ、あるいは農耕民や遊牧民の間の豊かな歴史的な相互関係を示しており、この両帝国の平和的共存のあり方は今日的な教訓を提供していると報告者は結んでいる。

CHOI 報告は日帝支配下の朝鮮半島の近代化において重要な役割を担った二人のロシア系ユダヤ人を紹介したものであった。朝鮮半島の啓蒙主義運動においてキリスト教の果たした役割は大きく、とりわけ聖書の朝鮮語訳を行なったのがアレクサンドル・ピョートルであった。また、日露戦争のときに日本の国債購入を通じて日本を救ったロシア系ユダヤ人資本家ヤコブ・シフが朝鮮半島における資本主義を考えるために重要な役割を担ったのである。(臼杵 陽)

Session 6 Islamic Movements, Civil Society and Democracy

このセッションでは、澤江史子氏(大阪外国語大学講師)、チャン・チーヒャン氏(JANG Ji-Hyang、韓国外国語大学校講師)、張曉東氏(ZHANG Xiaodong、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所教授)の3名から発表があった。

澤江氏は“Islamic movements and their civil/public dimensions: Preliminary observations on Turkish cases”のタイトルの下、トルコにおける NGO や私立の協会などによるイスラームに関わる活動(モスク建設、学校運営など)を通して、「イスラームと公的領域(public sphere)」の関係を指摘し、そこから「イスラームと市民社会形成」の関係まで考察を広げた。

澤江氏が非営利団体を研究対象としたのに対し、チャン氏は“Islam and Liberal Democracy in the Globalization Era: Assessing the Case of Turkey”のタイトルの下、同じトルコの「イスラーム的ビジネス(Islamic business)」を扱った。これは 1980 年代のオザル政権による経済の自由化政策以降に発展してきたもので、自由経済に関わるイスラーム的な価値を重視しながらも、世俗主義には反対の立場をとる

イスラーム的な資本主義者やビジネスマンの活動と定義される。さらに、彼らとトルコにおける民主化や諸政党との関係を通して、その政治的な意味も指摘された。両者ともに、公的領域や自由経済に関わるイスラームの伝統的価値と、それらの現代的な展開を論じ、興味深かった。

張氏は“ The Democratization in the Middle East after 9-11 Attack”のタイトルの下、中東地域全体の民主化に関わる問題を考察した。それは、2001年米同時多発テロ以降に始まったアメリカによる「拡大中東圏構想」と、中東各国における民主主義や市民社会の未成熟さとのギャップを論じるものであり、アメリカ主導で推進される中東に対する民主化圧力への危惧が示された。(松本 弘)

Session 7 Nationalism, Ethnicity and Islamic Networks in the Middle East

第7セッションでは、肖憲 XIAO Xian 氏(雲南大学)と大庭竜太氏(京都大学大学院)による二報告がおこなわれた。XIAO Xian 氏による報告“ The Islamic Linkage between the Middle East and Southeast Asia ”は、近年における中東と東南アジア間の交流の展開を、政府レベル、非政府レベル、そして「過激派」グループ間のネットワーク、の三つのレベルに分けて整理・概観するものであった。中東は東南アジアの諸運動にとってのインスピレーションの源流であり、グローバル化の影響もあって、最近では両地域間の交流は特に強まっていることが強調された。同報告に対しては、南アジア(インド亜大陸)というファクターも重要ではないかという指摘、また、中東と中国のあいだのネットワークをどう捉えるのかという質問が出された。大庭竜太氏による報告“ Between Kurdish Nationalism and Islam: Revaluating Said Nursi ”は、従来は専ら現代トルコにおけるイスラームの文脈で論じられてきたサイド・ヌルスィーの運動を、クルド・ナショナリズムの文脈に位置づけ直して分析し、それによってクルド・ナショナリズムというものの性格自体をこれまでとは異なる角度から検討しようとするものであった。同報告に対しては、ヌルスィーに強い影響を与えたと考えられるナクシュバンディーヤ・ハーリディーヤの思想的特徴に関する質問、また、ナショナリズムとイスラームの関係、中国のムスリムの事例とクルドの事例の比較の可能性に関する質問が出された。二報告に共通する問題として、異なる地域間の交流が新しい思想運動を生み出す可能性、「周辺」の運動が逆に「中央」に還流し、影響を与える可能性なども議論され、興味深いセッションとなった。(栗田 禎子)

Session 8 Gender in the Middle East

セッション8の発表では、ジェンダーに関わる3つの発表が行われた。後藤絵美氏は、エジプトの若手説教師アムル・ハーリドと従来型の説教師の、ヴェールを主題とする説教内容を比較し、従来型説教師が“fitnah”という観点から女性のヴ

ヴェール着用義務を説いているのに対して、アムル・ハーリドの説教は、“Haya”という観点からヴェールの意義を説いており、そのことが女性の自主的ヴェール着用促進に繋がっているとした。CHO Hee Sun 氏の発表は、湾岸諸国における衛星放送の視聴状況、好まれるチャンネルや番組の種類、番組に登場する女性のキャスター、実業家、政治家に対する視聴者の好感度などを、大学生（男女）を対象とするアンケート調査によって明らかにしようとした。Fariba ADELKHAH 氏は、イラン革命後、特に女性たちの間で盛んになったダマスカスへの聖地巡礼を事例に、巡礼という伝統的なシーア派の宗教儀礼が、革命後どのように変容してきたのかを考察した。氏によれば、従来、家族・親族単位の巡礼が主流だったが、女性中心の団体巡礼が増えただけではなく、彼女たちが巡礼旅行中に物品の売買によって商業的利益を得るなど、巡礼の女性化や巡礼と経済活動の合体などの新しい現象が生まれている。

いずれの発表も力作で、中東の女性たちの「主体的な」選択や活動を裏付けるものだった。後藤氏や ADELKHAH 氏が取り上げた、ヴェール着用や巡礼などは、一見きわめて伝統的な宗教行為であるが、女性たちがそこに従来とは異なる価値や可能性を見出している点が興味深い。CHO 氏の発表は、湾岸六カ国を対象とする大規模なアンケート調査の結果を分析したものだが、衛星放送の番組内容に対する評価を実際の政治行動に結びつけてしまうなど、データ結果の評価方法において飛躍がみられる点が気になった。（桜井 啓子）

日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会報告

日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会より、ご報告いたします。

1. 21-2号刊行のお知らせ

すでに4月にお手元にとどめていることと思いますが、21-2号が2006年3月に刊行になりました。論文（和文3本）のほか、東長靖会員の取りまとめによる特集1 “Sufism and Tariqa Movements in the Era of Islamic Resurgence”（英文4本）、三浦徹会員の取りまとめによる特集2 “Perception of Islam in Japanese School”（英文1本、和文1本）、書評1本が掲載されています。21-1号、21-2号の欧文率（外国語による論文等の割合）は合計で60%となっています。AJAMESは多言語による国際誌を方針としており、また科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けている関係で、一定の欧文率の達成が求められています。引き続き、特に外国語（欧米諸語、中東諸語）での投稿をお待ちしています。どうぞよろしくお願ひします。

2. 電子ジャーナル化の進展

すでに昨年のニューズレターでもご案内いたしましたように、日本中東学会は国立情報学研究所が運営する CiNii [サイニイ] (NII論文情報ナビゲータ) に参加し、本サービスを通じて、AJAMES掲載論文の電子版をインターネット上で講読できるようにいたしました (<http://ci.nii.ac.jp/>)。本サービスは一部有料ですが、本学会の会員であることを申告して利用登録をしていただきますとAJAMES掲載論文の本文データが無料でダウンロードできます。国立情報学研究所と定額契約を結んでいる大学等の機関に所属されている場合は(ほとんどの大学はこれに該当し、学生・大学院生も含まれます)、機関のLANを通じて利用すれば、登録手続きも不要です。会員以外の登録者の場合は1論文352円、非登録者の場合もPay Per View方式(クレジットカード決済)で1論文825円でダウンロード可能です。有料ダウンロードからの収入の一部は、学会にもたらされます。多くの方にAJAMES掲載論文を読んでいただく上で、とても便利な方式ですので、どうぞご利用ください。

2006年6月現在、20-1号、20-2号、21-1号の全文がすでにアップされています。それ以前の既刊号(1号~19号)についても、掲載論文等362本中、著作権処理を終了した303本が国立情報学研究所での作業の順番待ちの状態となっています。今秋までには全部完了予定との報告を受けています。最新号も順次アップされていく予定ですので、まもなく電子ジャーナルは恒常化する予定です。

なお、CiNiiは、世界的な学術ポータルサイトとなりつつあるGoogle-Scholarに書誌情報ならびに欧文抄録データを提供する方針を参加学会等に対し示しています。従来AJAMESは本文とは異なる言語による比較的長めのサマリーを掲載してきましたが、CiNiiならびにGoogle-scholarでの利用にあたっては、よりコンパクトな英文サマリーが、論文本文への導入としてたいへん有用となると予想されます。この事態に対応し、編集委員会としては、本年度、次号以後の掲載論文への英文抄録の添付を計画しています。

3. 本年度の編集委員会の体制

長年にわたって編集委員を務めていただいた東長靖委員が退任され、新たな編集委員として竹下政孝委員に加わっていただくことになりました。また、本年4月より長沢委員にかわり、林が編集長を務めることになりました。どうぞよろしくお願いたします。本年度の編集体制は以下のとおりです。編集長：林佳世子、副編集長：栗田禎子、国内編集委員：青山弘之、岡真理、竹下政孝、鷹木恵子、長沢栄治、長谷部史彦、松本弘、村上薫、水島多喜男、山口昭彦、山中由里子。海外委員としては、Dale F. Eickelman, R. Stephen Humphreys, Adbul Karim Rafeqの3氏に委嘱しています。なお、今年度中に海外編集委員の増員を予定しております。

4. 本年度の刊行予定

本年度より刊行時期が6月と12月になるとアナウンスしておりましたが、22-1号については編集作業が若干遅れており、1月遅れて7月刊行の予定です。ご迷惑をおかけしますこと、お詫び申し上げます。

22-2号への投稿は去る6月20日をもって締め切りました。次の23-1号への投稿締め切りは本年12月20日です。会員の皆様の投稿をお持ちしております。

また、AJAMESには毎号、特集が掲載されております。特集の企画についても受け付けておりますので、編集委員会にご相談いただければ幸いです。

5. 博士論文の要旨掲載

21-2号より、Middle East Studies in Japan ページの新コーナーとして、「中東研究博士論文要旨」を掲載しています。博士論文を提出された皆様には、その英文要旨のご提供を是非お願いします。この掲載を通じて、日本の中東研究の状況を国際的に発信できればと願っています。

6. 原稿執筆要領の遵守のお願い

昨年度、編集委員会はAJAMES原稿執筆要領を定め、書式に関し大幅な変更を行いました。新スタイルは21-1号より適用されています。執筆要領の最新版は学会ホームページにアップされています。執筆予定の皆さんには、学会ホームページより最新版の原稿執筆要領をダウンロードいただき、そのルールを遵守の上、ご執筆いただくようお願いいたします。20-2号までとはスタイル（書式）が変更になっておりますので、ご注意ください。

7. 編集委員会への連絡用メール・アドレス

投稿ならびにAJAMESについての諸種のご連絡には、次のアドレスを利用しています。

ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしくお願いたします。

(林 佳世子)

「日本における中東研究文献データベース 1989 -2006」

新規業績登録のお願い

「日本における中東研究文献データベース 1989-2006 検索」への業績登録にご協力いただき、どうもありがとうございます。年々、電子メールでの業績登録数も増加し、2003 年秋公開以来現在に至るまで、データ件数は 1 万件、利用アクセス数も 2 万 6 千を超えました。会員の皆様の 2003 年までの業績の登録もほぼ完了いたしました。

このたび、平成 18 年度日本学術振興会科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「日本における中東研究文献データベース 1989-2006」の交付(140 万円)を受けるとなり、2003 年のアンケート調査以降の業績調査を実施することにいたしました。登録していただいた業績の書誌情報は、「新規データ一覧(過去 1 年分)」および「日本における中東研究文献データベース 1989-2006 検索」に掲載いたします。

業績データは、本学会ホームページからのオンライン登録のほか、データベース編集係宛てに電子メール、郵送(同封の業績登録フォームをご活用ください)、FAX でお送りいただいても結構です。業績リストの電子ファイルをメールに直接添付していただいても構いません。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

1. 収録対象

1989 年以降に刊行された中東地域およびイスラームに関する研究文献(図書、論文等)、ただし事典のページの短い項目、新聞・週刊誌に掲載された記事はのぞく。日本人の編著については、国外での出版物を含む。

2. 項目

著者名：共著、共編の場合は共著者・共編者名も

標題/別標題：別標題は、標題以外の言語で標記されたタイトルのこと
欧文サマリーの有無

掲載誌/書：雑誌論文および論文集などの場合

巻号：雑誌論文の場合

出版社/出版年月：出版年は西暦を使用

頁：

叢書名：単行本の場合

3. 送付先

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

飯塚正人研究室内 日本中東学会 DB 編集係

e-mail: james@aa.tufs.ac.jp

TEL & FAX: 042-330-5543

(DB 編集担当 後藤 敦子)

日本中東学会共催資料・写真展「若きアフガニスタンの記録」

および関連講演会の開催

アジア経済研究所図書館と日本中東学会は、このたび共催で資料・写真展「若きアフガニスタンの記録 農業技術指導員尾崎三雄氏収集コレクションを中心に」及び関連講演会を開催いたします。

この資料・写真展は1930年代に日本人として初めてアフガニスタンに長期滞在し、農業技術指導にあたった故尾崎三雄氏（山口県出身）の現地収集資料、撮影した写真、およびフィールドノート等を展示するものです。特にフィールドノート20冊と400枚以上の写真は、当時を知るための世界的にも貴重な一次資料です。また写真については当時のネガを画像化して新たに作成したもので、当時の田園風景、人々の様子が見事によみがえっています。

今回資料・写真展を開催するにあたっては、尾崎三雄収集資料によって1930年代当時のアフガニスタンを垣間見ていただくとともに、尾崎氏の収集資料並びにアジア経済研究所図書館所蔵のアフガニスタン関係資料を今後のアフガニスタン研究に役立てていただきたいと思います。また講演会ではアフガニスタン研究のパイオニアである尾崎三雄氏の足跡を解説し、また戦前期の日本の「回教圏政策」との関わりについても紹介いたします。これらを通じて広く日本人のアフガニスタン及びイスラーム地域との関わりへの理解にも資することを念じております。

(アジア経済研究所図書館 泉澤 久美子)

* * *

資料・写真展「若きアフガニスタンの記録」

期間：2006年7月5日（水）～8月1日（火）

場所：日本貿易振興機構ビジネスライブラリー内

アジ研図書館サテライト

〒107-6006 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル6階

（地下鉄南北線「六本木一丁目」駅3番出口より徒歩1分また

は南北線・銀座線「溜池山王」駅 13 番出口より徒歩 3 分)

展示資料：

- ・尾崎氏撮影写真資料（パネル約 30 枚、写真ファイル数冊）
- ・尾崎氏フィールドノート、発表論文等のコピー
- ・尾崎氏収集資料（新聞および雑誌、当時の教科書等）
- ・アジア経済研究所図書館所蔵アフガニスタン関係図書（約 600 冊）

講演会「若きアフガニスタンの記録」

日時：2006 年 7 月 18 日（火）午後 2 時～4 時

場所：日本貿易振興機構ビジネスライブラリー内

講演：

鈴木 均（アジア経済研究所新領域研究センター副主任研究員）

「尾崎三雄のアフガニスタンにおける足跡」

臼杵 陽（日本女子大学文学部教授）

「日本における回教圏政策の原点」

定員：50 名程度

参加費：無料

* なお、本資料・写真展及び講演会は、科学研究費基盤研究(A)「日本・イスラーム関係のデータベース構築 戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開」(研究代表者：臼杵陽日本女子大学文学部教授)の補助を受けて開催されております。

第 15 回 KAMES 国際大会開催のお知らせ

韓國中東学会（KAMES）では、本年 11 月 30 日・12 月 1 日に上記の国際大会を Searching for a New Partnership with the Middle East のテーマのもとに開催します。KAMES では、毎年春に韓国語による国内大会、秋に国際大会を実施し、昨年ソウル大会では JAMES 会員 5 名が研究発表を行ったほか、三浦、臼杵、飯塚の 3 理事が参加しました。今回の大会では、「政策決定者やビジネスマンと研究者とのネットワークの構築」「アジアと中東との政治・外交上の協力関係」「アジアと中東との市民レベルでの協働関係の推進」の 3 つを目的とし、これに関わる政治、

経済、歴史、文化、宗教、言語、文学などの諸分野からの研究発表を求めています。研究発表を希望される方は、7月15日までにサマリーとCVをKAMESにお送りください。詳細は学会ホームページに掲載しています。（国際交流委員会）

国際交流基金委託業務「日本における中東研究」 「中東における日本研究」現状調査の終了

日本中東学会では、2005年11月に国際交流基金の委託をうけ、「日本における中東研究」「中東における日本研究」の現状調査を行い、2006年3月に報告書を作成・提出した。

日本における中東研究現状調査は、中東教育研究機関へのアンケート調査により、教育・研究の概況を把握することを主とし、12月に本学会会員宛にアンケートを発送、3月までに大学学部97、大学院博士前期課程65、大学院博士後期課程42、研究機関26からの回答をいただき、集計と分析を行った(ニューズレター106号27ページ参照)。また、中東教育研究支援制度(助成金、奨学金)についても概況調査を行った。「中東における日本研究」については、アラビア語、ペルシア語、トルコ語の日本関係出版物について、東京外国語大学中東イスラーム研究教育プロジェクトの協力をえて出版物リストを作成し、その分析を行った。なお本調査にあたって、国際交流基金から調査業務委託費(990,485円)の支払いをうけ、うち一般管理費62,771円は学会会計に収入として計上した。

日本における中東教育研究機関調査では、教育組織、教育分野、学生数、教員数、語学教育、留学制度などについて調査した。学部では、中東を専攻する学生数が700名(48機関、1学年あたり)、中東関係の授業を受講する学生の延べ数は2600にのぼること、大学院学生は博士前期70-80名(41機関)、博士後期50名(30機関、学生数は1学年あたり)、また200をこえる市民講座に学会員が講師として出講していることなど、中東関係の教育の広がりが確認された。科学研究費補助金でも、中東・イスラームに関する採択課題・助成額が5割近く増えている。その反面、研究・教育分野の偏りが再生産される傾向があり、大多数の大学機関では中東を専門とする教員は1-2名で、また中東を専門とする国立の研究機関はなく、教育や研究のうえでの拠点やネットワークづくりが急務であることがわかる。中東における日本研究では、アラビア語、トルコ語、ペルシア語のいずれも100点をこえる書籍の出版があり、とりわけ近年の傾向として、日本の経済発展とその社会背景に関するものが目立つ。

「日本における中東研究現状調査」の報告書は、上記アンケートにご協力をい

ただいた会員(機関)に郵送し、また06年5月の年次大会会長挨拶で概要を紹介した。後者については、7月中に学会ホームページに掲載する予定である。アンケートおよびその集計や分析にご協力をいただいた会員やアルバイトの方々にお礼を申し上げます。(三浦 徹)

学会へ入会を希望される方は、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームをダウンロードできます。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

寄贈図書

【単行本】

- 『アジア太平洋フォーラム・淡路会議 2005』アジア太平洋フォーラム淡路会議事務局、2006.
- 『今よみがえる古代オリエント 第13回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、2005.
- 『公開シンポジウム エジプトを護る 保存の世紀を迎えて：文化遺産保存の
実践と今後 予稿集』文部科学省平成17年度科学研究費補助金研究公開促進補助事業、2006.
- ハミード・トラブリー、ジャアファル・エブラーヒーミー著、愛甲恵子訳『フルーツちゃん!』詩の国イランの絵本1、ブルース・インターアクションズ、2006.
- M. アーザード著、愛甲恵子訳『ごきぶりねえさんどこいくの?』詩の国イランの絵本2、ブルース・インターアクションズ、2006.
- 長場紘『現代中東情報探索ガイド 改訂版』慶応義塾大学出版会、2006.
- アミン水谷周著『世界のマスジド』アラブイスラーム学院研究叢書5、アラブイスラーム学院、2006.
- 『紛争の総合的研究 平成15~17年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(研究代表者 押川文子)』2006.
- 福田安志編『情勢分析レポートNo.2 アメリカ・ブッシュ政権と揺れる中東』アジア経済研究所、2006.
- Muhammad bin Abdelwahhab al-Ghassani (ed. By Benhadda, Abderrahim), A Moroccan

Ambassador in Madrid at the End of the Seventeenth Century, *Studia Culturae Islamicae* 79, MEIS Series No.1, Tokyo: MEIS, 2005.

【逐次刊行物】

『季刊 アラブ』113号、日本アラブ協会、2005.

『季刊 アラブ』116-117号、日本アラブ協会、2006.

『国立情報学研究所ニュース』No.28-29、国立情報学研究所、2005.

ニューズレター 『CISMOR Voice』No. 4、同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

『一神教学際研究 2』同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

『一神教学際研究 1 別冊』同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

『CISMOR ユダヤ学会議』Vol.1、同志社大学一神教学際研究センター(CISMOR)、2006.

Al-Bahrayn al-Thaqafa, Vol.38-40(2004), Al-Bahrayn.

Acta Orientalia (Academiae Scientiarum Hungaricae), Vol.57 No.3-4 (2004), Budapest.

Newsletter, No. 66, Istanbul: O. I. C. Research Center for Islamic History, Art and Culture, 2005.

Nāme-ye Farhangestān (Iranian Academy of Persian language and Literature), Vol.6 No.2-4 (2004), Tehran.

Nāme-ye Farhangestān (Iranian Academy of Persian language and Literature), Vol.7 No.1-2 (2005), Tehran.

2007 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。年次大会の折に 2007 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方は、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。2006 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払いください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

なお、本年度年次総会で会費の改正が決めましたが、新会費の適用は 2008 年度分からになります。2007 年度分までの会費はこれまでどおり、正会員 8000 円、学生会員 4000 円ですので、お間違いのなきようご注意ください。

事務局より 会員名簿発行の隔年化について

ご存知のとおり、2005年4月から「個人情報の保護に関する法律」が施行されました。日本中東学会は、この法律の定める個人情報取扱事業者には該当いたしません。この法律の制定が象徴するように、近年内外で個人情報が重視されつつある状況に鑑み、会員の個人情報を取り扱う際には慎重を期したいと考えております。

加えて、毎年の会員名簿発行は学会会計への負担が大きいため、このたび、理事会は会員名簿の発行を隔年とすることにいたしました。

皆様にはご不便をおかけするかもしれませんが、右の事情をご理解いただき、会員名簿発行の隔年化をご了承いただければ幸いに存じます。

学会ニュースレターには毎号最新の会員異動情報を掲載しておりますので、2005年度会員名簿を適宜ご自身でご更新ください。

なお、次回の会員名簿発行は2007年5月になります。これに先立ち、会員個人情報の確認および会員名簿に掲載可能なご自身の情報項目についての意向調査を2007年2～3月頃に予定しておりますので、その際にはご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。
(飯塚 正人)

日本中東学会ニューズレター 第 107 号

発行日 2006 年 7 月 14 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

飯塚正人研究室気付

TEL & FAX 042-330-5543

E メール : james@aa.tufs.ac.jp

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>

郵便振替口座 : 00140-0-161096

銀行口座 : 三井住友銀行渋谷支店

普通 No. 5346808